

御嶽山の火山活動解説資料

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

<噴火警戒レベル2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ>

御嶽山では、2014年10月以降噴火の発生はなく、噴煙活動や山頂直下付近の地震活動は緩やかな低下が続いています。2017年7月に実施した山頂付近の現地調査で、高温領域に広がりはありません。このように、火山活動の静穏化の傾向が続いていることから、火口から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったものと考えられます。本日（21日）15時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

一方、2014年に噴火が発生した火口列の一部の噴気孔では、引き続き噴気が勢いよく噴出しています。状況によっては、火山灰等のごく小規模な噴出が突発的に発生する可能性があります。

【防災上の警戒事項等】

噴気活動の活発な噴気孔から概ね500mの範囲では、突発的な火山灰等のごく小規模な噴出に注意が必要です。

地元自治体等が行う立入規制等に留意し、登山する際はヘルメットを持参するなどの安全対策をしてください。

活動概況

- ・噴煙など表面現象の状況、噴気孔の状況（図1～2、図3 - ）

2014年10月中旬以降、噴火は観測されていません。

2014年9月27日に噴火が発生した剣ヶ峰山頂の南西側の火口列からの噴煙活動は、継続していますが、長期的には低下しています。2017年7月5日から7日にかけて実施した現地調査では、2014年に噴火が発生した火口列の一部の噴気孔から勢いよく白色噴気がでていましたが、これまでもみられていた噴気孔周辺の高温領域の広がりには変化は認められず、噴気孔の温度は2015年以降やや低下しており、噴煙・火山ガスの増加傾向はみられませんでした。

- ・地震や微動の発生状況（図3 - ）

山頂直下の火山性地震の発生回数は、2015年中頃から1ヶ月あたり50～90回前後経過していましたが、2017年4月以降は1ヶ月あたり30回程度とさらに低下しています。

- ・地殻変動の状況（図3 - ～、図4）

傾斜計¹⁾やGNSS²⁾連続観測では火山活動の高まりを示す変化は観測されていません。GNSS連続観測の一部の基線では、2014年10月以降山体の収縮によると考えられる縮みの傾向がみられています。

1) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがあります。1マイクロラジアンは1km先が1mm上下するような変化量です。

2) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、中部地方整備局、国土地理院、名古屋大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、長野県及び岐阜県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』『数値地図25000(行政界・海岸線)』『数値地図25000(地図画像)』を使用しています(承認番号:平26情使、第578号)。

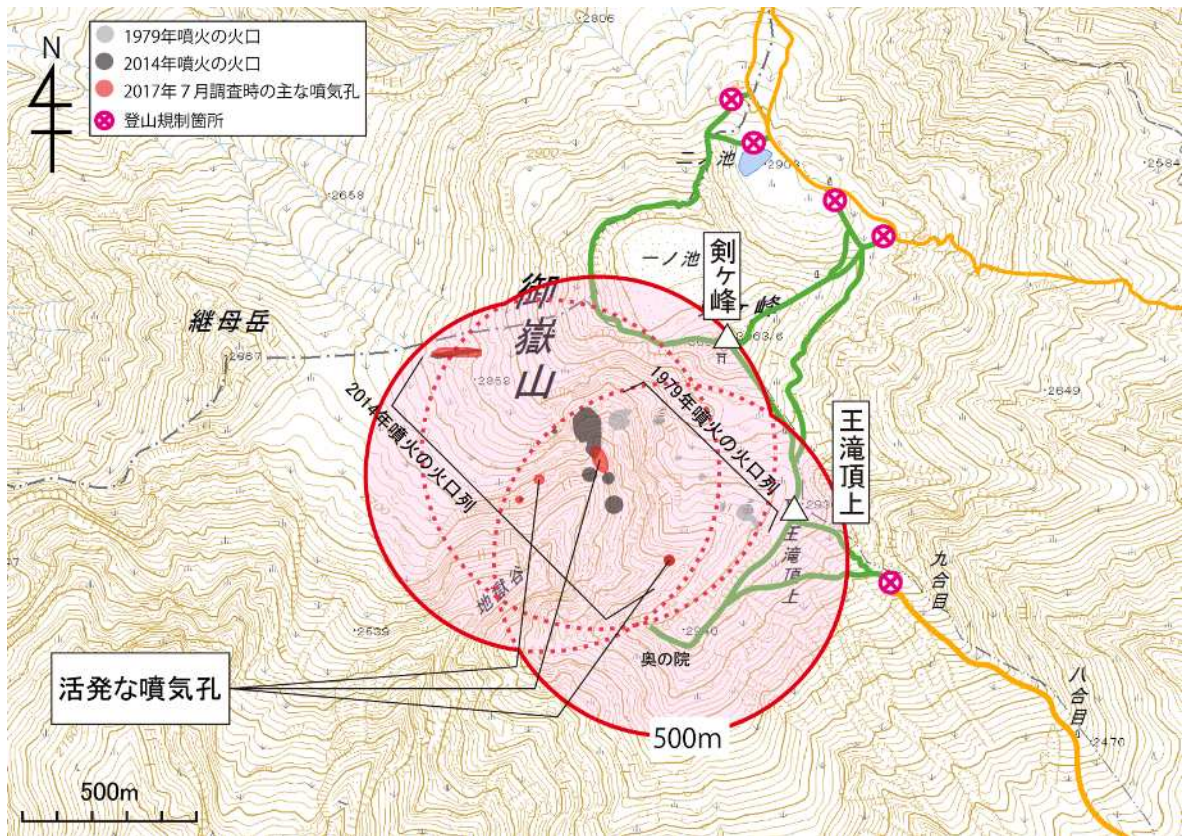
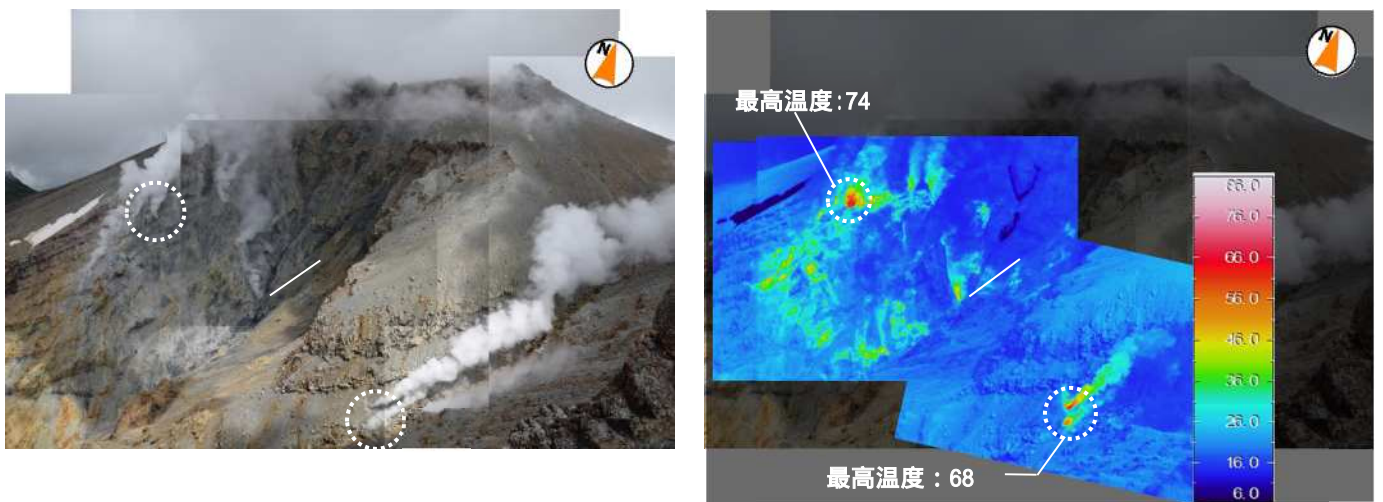


図1 御嶽山 注意が必要な範囲
 ・赤実線が活発な噴気孔から概ね 500m の範囲



2017年7月6日11時20分撮影

図2 御嶽山 地獄谷の状況（奥の院より撮影）

・2014年に噴火が発生した火口列の一部の噴気孔（图中 ~ ）から勢いよく白色噴気がでていました。

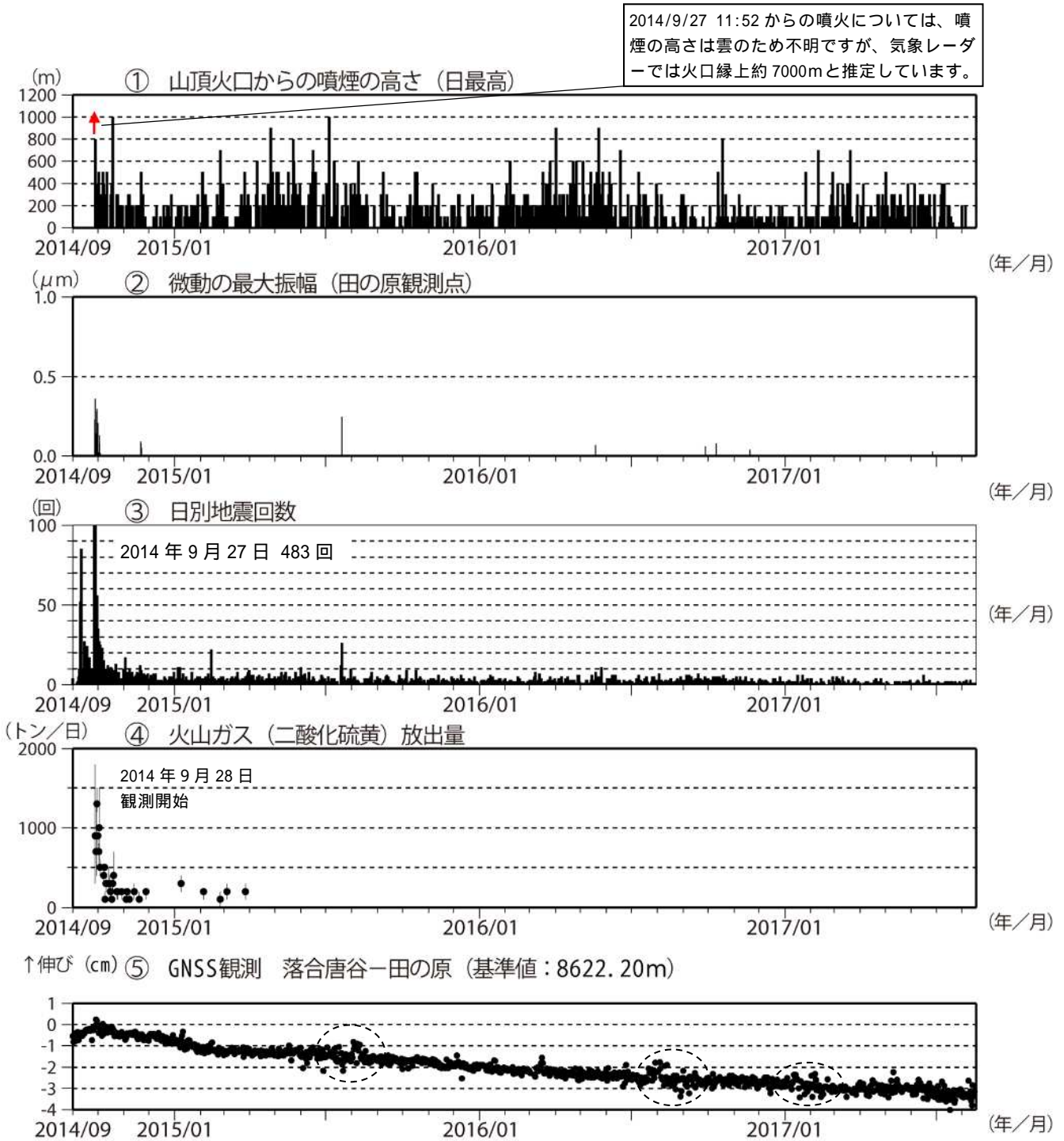


図3 御嶽山 最近の火山活動経過図（2014年9月1日～2017年8月17日）

監視カメラによる噴煙の高さ 噴煙の高さは日最大値（噴火時以外は定時観測（09時・15時）の値）。矢印は噴火発生を示します。また、視界不良時には噴煙の高さが表示されていませんが、2014年9月27日の噴火発生以降は噴煙が連続的に発生しているものと考えられます。

火山性微動の最大振幅は田の原観測点の上下動振幅です。

図4のGNSS基線 に対応した基線長の変化を示します。点線で囲んだ変化は、火山活動によるものではないと考えられます。

